菱沼従尹・喜多村治雄・豊川裕之共著『21世紀の健康学』

大修館書店，1985年1月，292ページ

今日ほど国民の健康が問題となった時代はなかったといってよい．先例のないような人口高齢化が避けられない日本人口の将来にとって，高齢者の就労，それを支える健康は，年金，医療問題との関連において重大な意義をもっている．そのような意味において，21世紀の健康を考えようとした本書は，真に時宜をえた企画である．もちろん，著者達も指摘している通り21世紀の健康の予測は難事中の難事であることはいうまでもないが，著者達と共に多くの人びとがこの問題にさらに深い関心と研究を進める契機となることが本書に期待される最大の貢献であるといえよう．さらに，本書のもっている極めてユニークな意義を考えてみよう．

第1は，健康問題といえばじゅうらいはとかく常識的な問題として一面的な接近に終わりがちであった問題を，真に学際的な観点から科学的に接近しようとした点が注目される．医学的にみても，公衆衛生学，病理学，疫学といった分野の専門家のみならず，科学史，ロボット工学，人口学そしてまた経済の専門家が動員されており，ここで健康といった用語に象徴されているような総合的な健康論的アプローチはいまだかってなかったといってよいであろう．

第2は，このような健康論の高度な取り扱いの理解は決してよういではないが，本書はこの点を十分に考慮した気配りが察せられる．特に注目すべきは第3章の座談会である．ここでは本書の執筆者でない専門家も加わって，課題である21世紀の健康問題が広汎に従横無尽に議論が展開されており，読者にとっても理解し易い．それだけでなく，本書の他の章の執筆者の主張しようとする重要なポイントがこの座談の中で話言葉でのべられているため，この座談会だけを読んでもほぼ全体を理解することができるという心にくい仕組みになっている．

次に，それぞれの章の特徴についてかんたんに触れておこう．第1章は菱沼論文であって健康論の生物学的条件ともいうべき人間の寿命，したがって死亡の構造，その将来変動についての分析が著者の博学的知識と達意の文章によって読み易く綴られている．寿命の長寿化にともなう生存率曲線の直角的下降の法則は，著者がしばしば指摘しているところであって，社会，経済的にも行政上にも考慮されなければならない問題点である．第2章の喜多村論文は，ここでただひとりの経済の専門家であって，じゅうらい考慮されることの極めて少なかった経済学的視点からの検討がされている．つまり，21世紀への大変革期の問題としてのとらえかたである．貧困な条件の中での健康の達成，維持がこんなんであることはいうまでもない．ここに喜多村論文の意義があるのであろう．世帯構造の将来変動の中で老人の単身世帯の増加の可能性が大きいという点から，このような単身世帯向きの住宅政策の必要性が指摘されていることは注目すべきであろう．第4章は21世紀の健康問題を真正面から挑戦した豊川論文である．次のような5つの仮説を基本方向として21世紀の健康の予測展開を試みている．それは(1)心の重視，(2)社会生活規模の小集団化，(3)規格化から多様化への変化，(4)健康観の個と集団間のギャプの顕在化，(5)栄養への関心の増大である．そして，これらの仮説の根拠を具体的に証明するという手法がとられている．特に戦後における日本人の生活，行政，価値観の大転換の歴史的現実をふまえての将来への予測であって強い説得力にあふれている．また，豊川論文には栄養・食生活の問題は健康の観点からのみでなく，人口，食糧問題の観点からも重要な関心事となることを指摘していることが注目される．

いずれにしても本書は学際的な健康学として真に興味深く，多くの関連分野の人びとに一読をすすめたい．

（内野澄子）